ひとりの人間として
―― ともに語りあった5日間
そして始まるあたらしい一歩

パンジーメディア「きぼうのつばさ」2024年３月放送より

大会実行委員長・山田　浩
パンジーメディア・小川　道幸

2023年10月13日。大阪で開かれたピープルファースト大会。今回で28回目になります。全国から多くの知的障害者とその支援者が集まりました。その数1300。これまでで一番多い参加者です。

今回の大会のテーマは「入所施設をなくそう」。入所施設は本当に必要なのかをみんなで考えるために、全体会で一本の映画を見てもらいました。「大空へはばたこう～自立への挑戦～」（パンジーメディア制作）のダイジェスト版です。日本で入所施設はどのように始まったのか。そして、今、入所施設はどうなっているのか。また、入所施設をなくすために私たちはこれからどうすればよいのかがテーマの映画です。

今も2500以上の入所施設がある日本。世界は入所施設をなくすことにどう取り組んできたのでしょうか。海外から参加した３人のゲストが、その経験を話してくれました。

その一人、ニュージーランドのサー・ロバート・マーティン。国連の障害者権利委員の一人で、自らも知的障害があります。

「今日は、私の体験と入所施設がもたらす傷について話したいと思います。私はニュージーランドの入所施設で育ちました。決してこのような経験をしてはなりません。人は傷つけられ、その傷は一生続きます。家族と一緒に暮らす権利も奪います。入所施設は、人が健康で元気でいる権利も奪います。入所施設は、あなたがどんな人であるかということを奪います。私は人ではありませんでした。何も持っていませんでした。施設を出た時、そこからもう一度人生を学びなおさなければなりませんでした。私は人との付き合い方もわかりませんでした。私たちは地域で、自分で選んだ生活を送ることを求めています。障害者を価値ある市民として扱うようなインクルーシブな社会の実現に向かって政府が動くことが大切です」

ロバートが育ったニュージーランド最後の大きな入所施設が閉鎖されたのは政府が閉鎖を決めた12年後でした。ピープルファーストが国会まで行進し、強く訴えたのです。

「私は国連障害者権利委員会の委員としての役割に誇りをもっています。この委員会は、権利条約に署名した国が、条約をどのように守っているのかを調べています」

国連の障害者権利条約を日本は2014年に批准しました。そして2022年、日本がこの条約を守っているかどうかの審査がありました。ロバートもその審査委員の一人です。そして、多くの勧告が出されました。

ロバートと山田さん

「障害者が入所施設で暮らすことを強いられることがいまだに行われています。そのため、障害者権利委員会は脱施設に関するガイドラインをつくりました。私たち委員会は、日本がこのガイドラインを使って、障害者権利条約を守り、入所施設をなくすことを望んでいます。今こそ、良い方向に変える時です。施設のもたらす被害について声を上げ続けましょう。他の市民と同じように地域で生活できるように声を挙げましょう。自分の人生を自分で選ぶと、声を上げ続けましょう。一緒にやれば私たちは強く、変化を起こすことができます。強くあれ」

カナダから参加したコリー・アールさんは、ピープルファーストの中心メンバーとして、入所施設をなくすために長く活動してきました。

「かつてカナダには60の大きな入所施設がありました。知的障害者や精神障害者たちを住まわせるために建てられました。地域からは離れたところに作られ高い壁に囲まれて、その存在は隠されていました。そこに住む人々の部屋のドアには鍵をかけられていました。入所施設では専門的なケアを受けられ、子どもたちにとってよいことがあると親たちは信じ込まされたのです。しかし、施設を出ることができた障害者はわずかでした。ほとんどの人は死ぬまで施設にいました。1960年代末、社会の人たちは施設は何のためにあるのかという疑いを持ち始めました。1974年カナダでピープルファーストの活動が始まりました。主な目的は、入所施設の閉鎖でした。自分たちの声が聞かれること。そして完全な人権を要求しました。1985年までに29の大規模入所施設が閉鎖されました。そして政府に資金を出すように要望し、施設にいる人たちの地域移行の取り組みを始めました。また、今も残っている入所施設を監視しています。どういう状況になっているのかを。すべての人が入所施設ではなく、地域で暮らすためにはまだやるべきことがたくさんあります」

知的障害者が自分たちで運営するスウェーデンのグルンデン協会。そこの副理事長を務めているエミリー・ムティエンさんは、スウェーデンで入所施設が解体された歴史を語ってくれました。

「私は、障害がある人、ない人の線引きのない世界を夢見ています。私たちはみな平等で誰もが価値のある存在です。障害があってもなくても、自分の人生を自分で決める権利があります。スウェーデンで最初に入所施設が造られたのは1895年です。入所施設で何が起こっていたのかを知っている人はいませんでした。1950年代の中ごろ変化が起こりました。二人の男性が知的障害者の置かれている状況を世の中に公表しました。そして、社会の無関心と当

事者の悲惨な状況が明らかになりました。この時、入所施設の様子が新聞や雑誌をとおして国中に知れました。そして人々が話し合うようになり、政治家や国民の目を覚ましたのです。1986年新しい法律ができました。知的障害のある人が初めて市民として認められたのです。2000年１月にはすべての入所施設が閉鎖されました。みんなで声を上げ、社会に働きかけることが大切です。私たちが協力することは障害のある人が差別や、あらゆる入所施設から解放されるために、とても大切なことです。私たち一人ひとりは小さなアリのような存在かもしれませんが、小さなアリがたくさん集まればとても強くなります」

世界の仲間は、私たち日本の知的障害者がこれから進んでいく道を示してくれていました。

今、日本の知的障害者はどんな状況に置かれているのか。地域で活動しているピープルファーストの仲間から報告がありました。

「７年前の2016年７月26日に、神奈川県の障害者支援施設の津久井やまゆり園で、本当に恐ろしい事件が起きました。障害者は生きる価値がないという理由で、元職員の犯人によって19人の仲間や多くの仲間が傷つきました。仲間の人生は、親や職員、行政が決めるものではありません。仲間の本人が決めるものです。自分が幸せか幸せではないか人に決められたくはありません。今も全国で虐待事件が起きています。仲間が傷つき、虐待を受けたという話を聞いて、怖い気持ちになってしまったという仲間もいます。虐待というのは、殴るとか言葉だけではありません。無視や威圧的な態度も虐待になることもあります」

津久井やまゆり園は３年前に建て替えられ、ほとんどの人は再び、そこで暮らしています。園から出て地域で暮らしはじめた人は、150人ほどいた入所者の内わずか10人足らずです。

会場からは多くの声が上がりました。「入所施設は絶対いりません」「スウェーデンもカナダもなくしている。日本も早くなくしてほしい」「安心して町で暮らせる、そういう制度を国には作ってほしいけど、国は障害者の意見を聞いてくれないので悲しいと思います」

二日目の分科会では、障害者権利条約を実現するために、私たち知的障害者は何をすればよいのかが話し合われました。ピープルファーストニュージーランドのリーダー、ロニー・シオネさんは、政府とピープルファーストが、協力して法律を作っていることを話してくれました。

「私たちは、障害者団体連合に参加しています。この団体は、政府の多くの部門と協力し、彼らの仕事についてアドバイスしています。また、政府の障害者を支援する機関と一緒に、障害者支援の行動計画を作ることにも取り組んでいます。法律を変える時は、私たちは政府に対して、どういう変更をするのかの文章を作ります。そして、どのような変更が私たちのためになるのか、ためにならないのかを話しています」

スウェーデン・グルンデン協会のオーラ・ムティエンさんは、2008年に条約を批准したスウエーデンの取り組みについて話してくれました。

「すべての障害のある人が、どこで誰と暮らしたいかを選ぶ権利が、同等にあることを定め

ています。これは、入所施設に無理やり住まわせてはいけないということです。スウェーデンでは大型の入所施設をつくることは禁止されています。また差別禁止法もあり障害を理由に他の人よりも劣った扱いをされることは禁止されています。人とのつながりがない人生なんて、いったいどんなものなのでしょうか。19条に書かれていることが本当になるまでの道のりは、まだ遠いです。たくさん前に進んできたスウェーデンでも、まだ先は長いです。これは、私たち全員が社会への完全参加に向けて努力し続けていかなければならないということです」

最後に、日本でピープルファーストに長くかかわり、これまで中心的な活動をしてきた土本秋夫さんが発言しました。

「ピープルファーストジャパンが誕生するということで、全国の仲間たちが集まって、自分たちの主張、考え方を伝えよう、大きな声を挙げようということで立ち上げました。だけど、まだまだ私たちの権利の声が届かないところがいっぱいあります。日本でも大型施設をなくし、すべての人が地域で暮らせるようにしていきたいと思っています。差別禁止することも含めて、私たちは声を上げていきたいなと思っています。まだまだ私たちの声がたりないところもあります。それでなくても、もっともっと伝えていきたいなと思っています。私たちの声がやっと届いて、障害者権利条約が設立されてきています。障害者である前にひとりの人間です。これからも大きな声で言っていきたいなと思っています」

二日間にわたって話しあった今回の大会。あきらめないで、みんなで社会を変えていく。仲間がいることの強さ、そして、いっぱい力をもらいました。

私たちは翌日から、海外の仲間たちと京都、横浜で集会を開き、最終日の講演は、東京の衆議院議員会館。その院内集会で、国会議員を前に入所施設をなくすことを訴えたのです。

今回の五日間の様子は、パンジーメディアのインターネット放送局「きぼうのつばさ」3月放送で特別番組として放送します。https://pansymedia.com